

入所編

特養待機者が多いが、特養の入所条件は厳しくなっている。かといって共働きの子供世代には在宅の介護力が足りない。そんな方はどこに行ったらいいのか。国は内情を理解した改正を行ってほしい。

介護職の人員が確保できなくなっている。さらなる待遇改善を…。



「今月の漢字」

皆様、あけましておめでとうございます。
この「今月の漢字」のコーナーも約1年半、習字クラブ同様、皆様に支えられ、続けてこれた事にまずは感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。
さて、今回の「水仙」。ただ冬の花ということできっと選んだのですが、正月に飾る花として用いられる、とても美しく香りの良い花であると、あとから知りました。結果的に最高のチョイスだったわけです（自評）では最近、変に味をしめた俳句で今月もシメたいと思います。

陶酔せん

お題に「水仙」
推薦し

なんちゃって感がハンパないですが、今年もこのコーナーに関しては、ゆる〜い感じでいきたいと思ひます（笑）。よろしくお願ひします。

森井 雪ノ丞



自宅へ帰られる方はやはり嬉しそうにされている。一方で家族様の負担は大きい。施設と家族様が密に連携をとることで在宅復帰を支援していければと思う。

在宅で過ごされる利用者様のご家族は身を削って介護されている方が多いように感じる。利用者様が一日でも長く在宅生活を続けるために、上手に施設や介護サービスを利用して欲しい。

約60年前には8割を超える方が自宅で最期をむかえていました。しかし、1970年代には逆転し、現在自宅で亡くなる方は全体の約1割に、それでも6割以上の方が「最期は自宅で過ごしたい」と願っていることも厚生労働省アンケートの回答でも明らかです。特に不安とされる終末期ケアにおいて、「介護してくれる家族に負担がかかる」「24時間対応のところが近くにない」「急変時に不安」「認知症になったらとてもとても」などといった想いで施設や病院への移行をやむなく選ぶ傾向にあります。

そこで、このような課題をふまえて 私達、介護老人保健施設での役割をもう一度考えます。

- 1) 包括ケアサービス施設
医療、介護、リハビリなど連携した支援計画
- 2) リハビリテーション施設
家庭環境の整備や生活での機能向上を目的とするリハビリ
- 3) 在宅復帰・在宅支援施設
自立した在宅生活を送れるよう他サービスとの連携できるシステム
- 4) 地域に根ざした施設
すみなれた地域の情報の共有と、福祉機関との一体となるケア等が掲げられます。高齢者が住み慣れた地域、居宅で最期まで老後を過ごしたい。私達は、こんな想いを支援する施設を目指します。

特集 国の在宅復帰強化 について介護職員が思う事

国が「施設から在宅へ」と介護保険改定を行ってから、老人保健施設の状態は厳しいものとなってきた。従来は在宅復帰施設として出来た老健だが事実上、特養に入所できない方の受け皿となり特養待機者が入所者の大半を占めて「第二の特養」と呼ばれていたものが一転、在宅復帰を積極的に進める施設には加算を、従来通り「第二の特養」状態を続ける施設には減算を、という方向転換を行ってきた。それに加え、改定の度、介護報酬の減額、要介護認定が厳しくなり施設入所自体が難しくなってきた。今後の高齢者の増加により、高齢者は大半が在宅で生活をする事を強いられる事になる。

今や、あじさいを始め老健施設側でも介護の質を落とさずに健全な施設として、生き残るために「在宅強化型老健」へと舵を切る過渡期へと差し掛かっている。そんな社会情勢の中、私達、あじさい職員達はどんな思いで仕事をしているのだろうか？

デイケア編

身体能力が上がってデイケアを卒業される利用者様に対しては嬉しく思いますが、そんなに身体能力が変わらないのに要介護から要支援になり、サービス限度額が少なくなって、利用者様が満足のいくリハビリを受けられずにいることが寂しく思います。
リハビリ科

在宅生活を維持するためのリハビリや入浴を、というのは理解できるのですが、これらがデイ利用時間の大半を占めている。リハビリ入浴以外を希望されている方にレクリエーションなどを提供したいが、手が足らず、不満をもたれているのでは？…。



介護保険が改定されるたびに仕事量が増えている気がする、なのに賃金は変わらない。また、利用者様に関わる時間が雑務に削られているような印象を受ける。この先介護の質を維持していけるのだろうか？